

報道関係者各位

「遺贈」に関する意識調査2018

70代の8割以上が「遺贈」を認知。全体の約5割に遺贈意向。

～年代問わず、人道支援や医療支援など社会貢献を目的とした遺贈が好まれる傾向～

国境なき医師団日本（会長：加藤寛幸、事務局長：ジェレミィ・ボダン）は、近年「法定相続人がいない」「社会への恩返しをしたい」などの理由で関心が高まっている「遺贈」に関する現状や課題を明らかにすることを目的に、2018年6月22日～28日の7日間、全国の20代～70代の男女1200名を対象に「遺贈に関する意識調査2018」をインターネット調査し、集計結果を公開いたしました。（調査協力会社：株式会社ネオマーケティング）

そもそも「遺贈」とは？

「遺産を子どもや配偶者などの法定相続人に継承させる以外に、遺言に基づいて法定相続人以外の特定の個人や団体に遺産の一部または全部を譲り渡す」ことを指します。遺贈先として、親しい友人やお世話になった人だけでなく、NGO・NPO法人などの団体にも、遺産の一部または全部を継承できます。別名“レガシーギフト”とも呼ばれ、【遺言による新しい寄付の形】として注目されています。国境なき医師団への遺贈も増加しており、遺贈寄付として託された遺志は、医療・人道援助活動を通して多くの命につながっています。

遺言書作成に70代の約6割が前向き。「遺贈」の認知度は70代の8割以上！

遺言書準備の必要性を理解している人は70代で約6割と、**高齢層ほど遺言書準備は“自分ごと”と捉えている**と言えます。また、「遺贈」の認知度は40代から特に上昇し、**70代で85.5%と8割以上に達する**ことが分かりました。一方で、**遺贈の意向度は年代によって大きな差はなく、約5割に遺贈意向がある**ことが判明しました。さらに詳しく見ると、**遺贈への認知や理解が深まるほど、遺贈の意向が高まる傾向も見受けられます**。他の回答を見ても「専門家の意見を聞きたい」「遺贈についての知識を身に付けたい」「遺贈を検討したい」という回答が多く、**遺贈に対して学ぼう、取り組もうという意識が高い**ことがうかがえます。近年は幅広い層で社会貢献意識が高まっていると言われますが、その中で遺贈寄付という形での貢献も注目され始めていると考えられます。

役立てたいのは人道支援・医療支援などの“社会貢献”。使われ方の透明性・信頼性がポイント。

遺贈の最大のメリットとして「**遺産の託し先を自分で決められること（46.1%）**」が挙げられました。さらに「遺贈が社会現象化すればもっとよい社会になる」という意見も多く見られ、**自分らしい人生の生き方や終わり方を考える人にとって、遺贈は今後注目のトピック**と言えます。遺贈をする場合、どの年代も共通して「**人道支援**」「**医療支援**」「**災害復旧支援**」など**社会貢献に役立てたい**という意識が高い結果となりました。一方で、遺贈への不安要素として「寄付した遺産の使われ方」や「寄付する団体選び」などがあげられ、**受遺者側の信頼性が問われている**ことがうかがえます。

家族・親族の遺贈についてはどの年代も5割以上が賛同。話し合いは、法事やお盆に。

家族や親族が遺贈を希望した場合の賛否について、賛同するという回答が最も多かったのは「自身の子ども」、次いで「自身の親」、「自身のその他親族」「自身のパートナー（夫・妻）」という順になりました。男女年代別で見ると50代女性が他の年代と比べて低く、いずれの項目も5割を下回り、特に「自身のパートナー（夫・妻）」への賛同については4割弱です。回答者の中では親子2世帯という家族構成が多いことから「**子育て**」や「**親の介護**」などを考慮しての回答であることが推測されます。家族・親族と話し合う適切なタイミングとして「**親族の法事**」「**お盆**」「**冠婚葬祭**」など家族・親族が集まる状況が挙げられた一方で、「**タイミングは関係がない**」という結果が6割を超えていることから、話し合う機会はいつでも得られるという認識であることもうかがえます。

本調査および遺贈寄付に関するお問い合わせ先

国境なき医師団日本 担当：宮原
E-Mail：legacy@tokyo.msf.org
電話：03-5286-6194/FAX：03-5286-6124

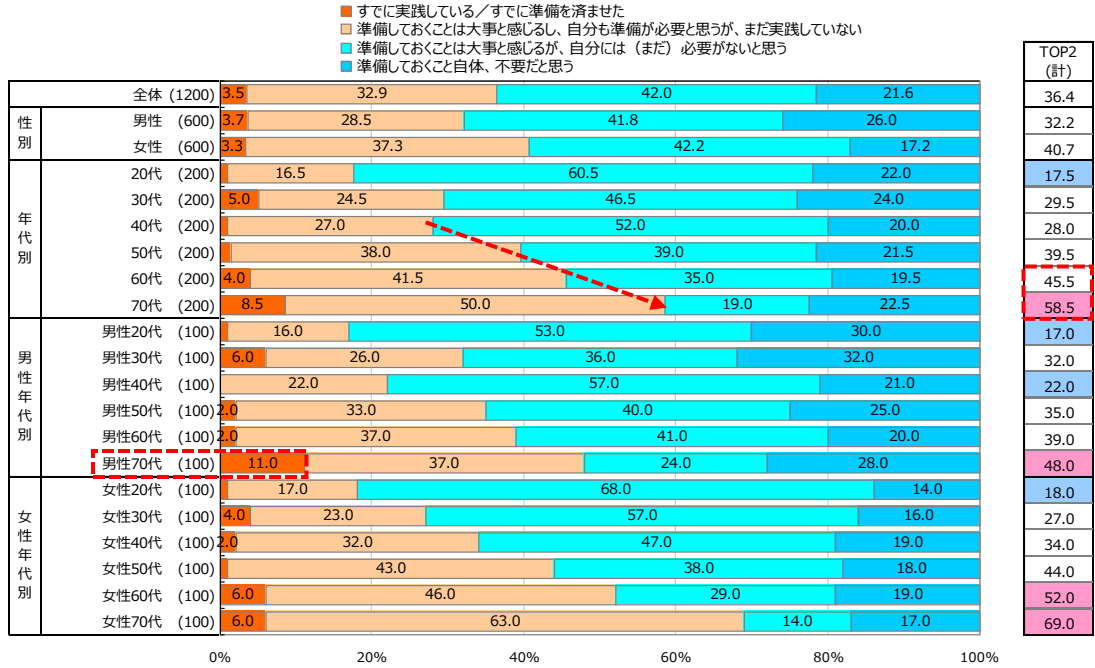
報道関係者様からのお問い合わせ先

国境なき医師団日本 担当：館
E-Mail：press@tokyo.msf.org
電話：03-5286-6141/FAX：03-5286-6124

【「遺言書」の作成について】

- 遺言書の準備の必要性を理解している人は、60代で45.5%、70代では58.5%と半数以上にのぼり、**高齢層ほど「遺言書準備は“自分ごと”」という認識が進んでいる**と言えます。
- 特に男性70代では**11.0%**が「すでに遺言書の準備を済ませた」と、意識の高さがうかがえます。

Q. 「遺言書の作成」とご自身との関わりについて、あてはまるものをひとつずつお選びください。（お答えはそれぞれ1つ）



【「遺言書」に対する気持ち】

- 遺言書に対する気持ちで最も高いのは「遺言書は元気なうちに書くべきだと思う」(72.5%)であり、**早めに遺言書の準備をすることの必要性を感じている人は多い**ようです。
- 「親族以外に資産を継承する『遺贈』ができると思う」も51.7%と高い結果となりました。

Q. あなたの「遺言書」に対するお気持ちやお考えとして、あてはまるものをそれぞれお選びください。（お答えはそれぞれ1つ）

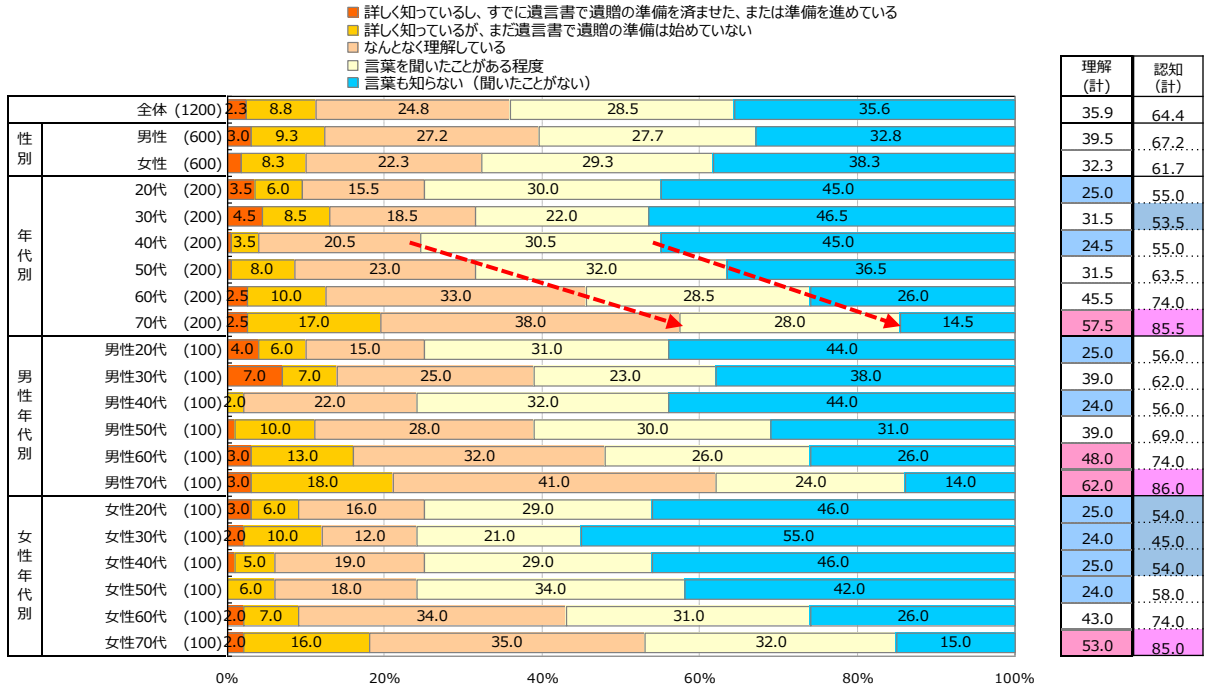
※値は「そう思う」



【「遺贈」の認知度・理解度について】

- 「遺贈」の認知度は全体の64.4% 理解度は35.9%と、2/3が多少なりとも知っているという結果に。
- 認知度・理解度ともに、年代が上昇するほどに高まる傾向にあり、特に60代以上の高齢者世代で「遺贈」は注目度の高いトピックのひとつであるといえます。

Q. 終活・遺言書作成にあたって、資産を継承する方法として「遺贈」というものがあります。あなたご自身と「遺贈」の関わりについて、最もあてはまるものをひとつお選びください。（お答えは1つ）

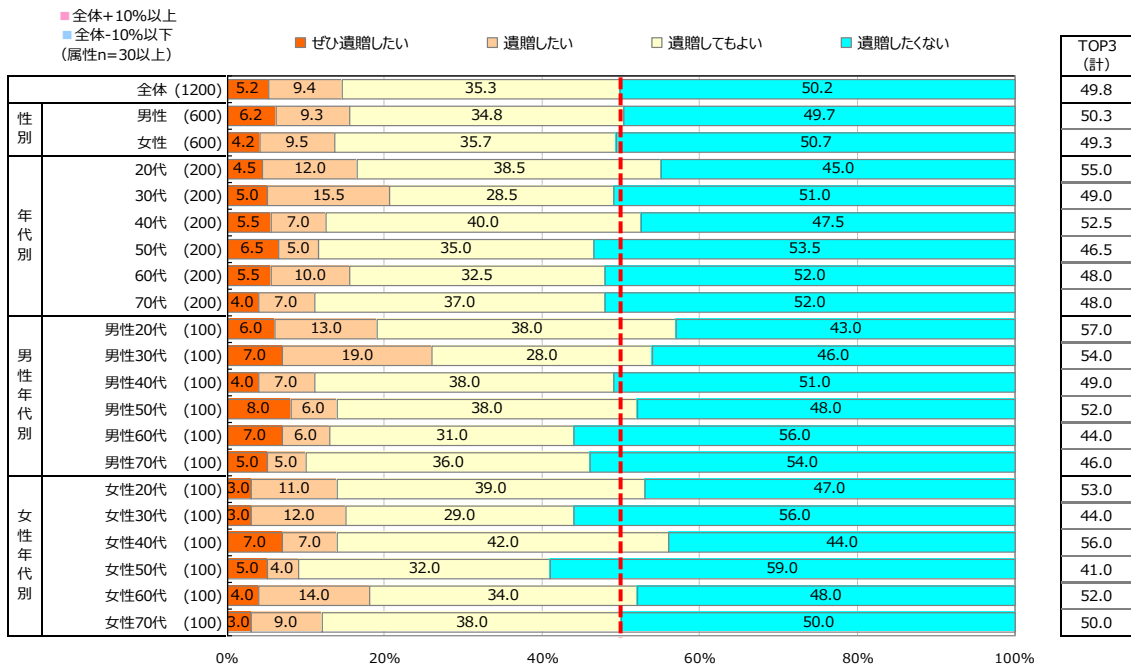


*理解 (計) : 「詳しく知っているし、すでに遺言書で遺贈の準備を済ませた、または準備を進めている」の合算値
*認知 (計) : 「言葉も知らない (聞いたことがない)」を除いた値

【「遺贈」の意向度について】

- 「遺贈してもよい」までを含めた遺贈の意向度は49.8%と、全体の約半数に遺贈の意向。
- 突出して意向が高い世代はなく、20代~70代の間に大きな差はないため、幅広い世代の方に「遺贈」が支持されていることがうかがえます。

Q. 終活・遺言書作成にあたって、資産を継承する方法として「遺贈」というものがあります。あなたご自身と「遺贈」の関わりについて、最もあてはまるものをひとつお選びください。（お答えは1つ）



*TOP3 : 「ぜひ遺贈したい」「遺贈したい」「遺贈してもよい」の合算値

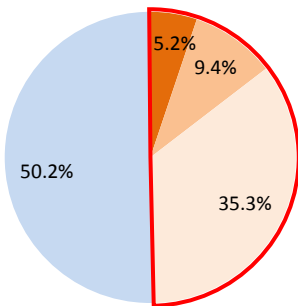
【「遺贈」の意向度が高いのはどんな人？】

- 遺贈に対する理解が深まるほどに、遺贈の意向度も高まることが確認できました。
本調査などで遺贈が積極的に取り上げられ理解が深まることで、意向者の拡大が期待できます。
(回答者全体の意向度 49.8% → 遺贈認知者の意向度 60.0% → 遺贈理解者の意向度 63.8%)
- さらに、「NGO・NPOへの寄付」や「株式購入や金融投資」の意向が高い人ほど遺贈意向度が高まる傾向にあることも分かりました。
社会貢献意識の高い人や利益を社会に還元したい人と「遺贈」は深い関係がありそうです。

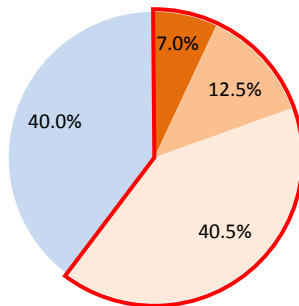
Q. 終活・遺言書作成にあたって、資産を継承する方法として「遺贈」というものがあります。
あなた自身と「遺贈」の関わりについて、最もあてはまるものをひとつお選びください。(お答えは1つ)

■ ぜひ遺贈したい ■ 遺贈したい
■ 遺贈してもよい ■ 遺贈したくない

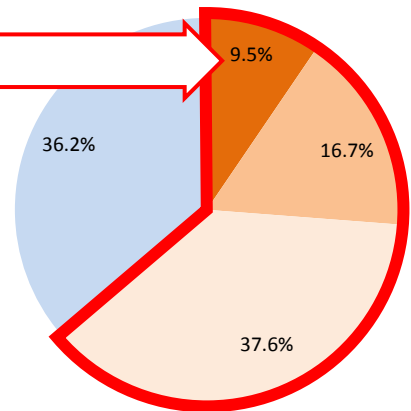
遺贈の理解が深まるほどに遺贈意向度が高まる傾向！



全体ベース(N=1,200)
意向計：49.8%

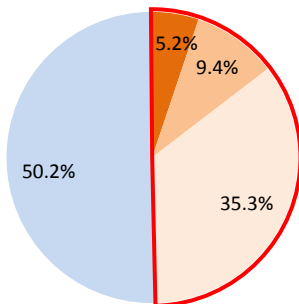


遺贈認知者ベース(N=773)
意向計：60.0%

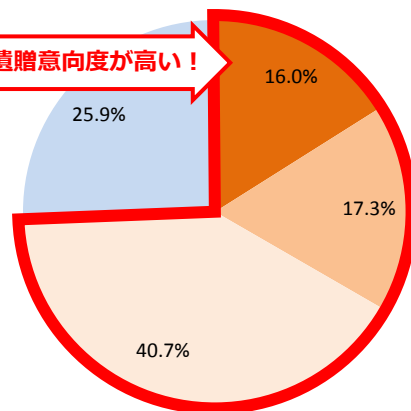


遺贈理解者ベース(N=431)
意向計：63.8%

「NGO・NPOへの寄付」の意向がある人は遺贈意向度が高い！

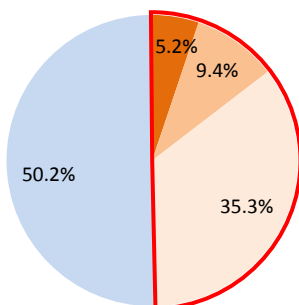


全体ベース(N=1,200)
意向計：49.8%

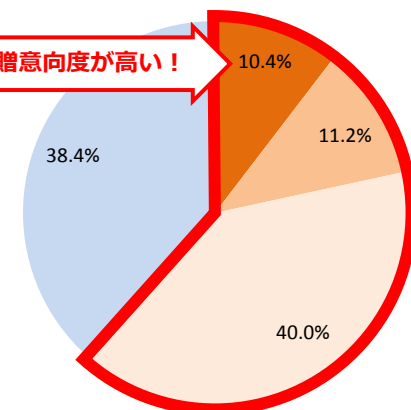


今後NGO・NPOに寄付をしたい(N=81)
意向計：74.1%

「株式購入や金融投資」の意向がある人は遺贈意向度が高い！



全体ベース(N=1,200)
意向計：49.8%



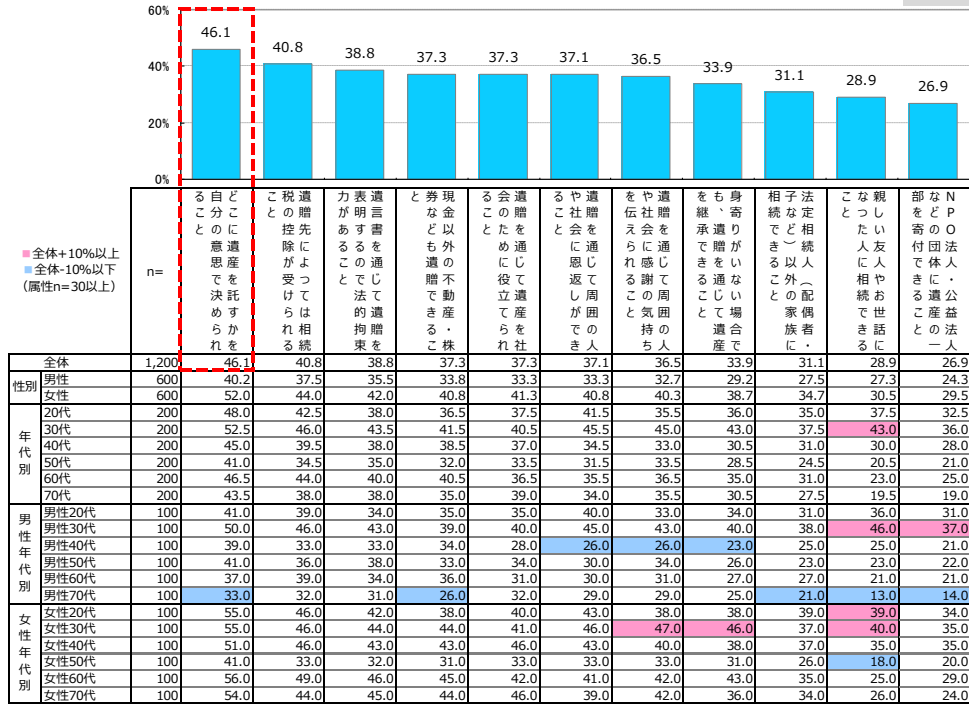
今後株式購入や金融投資をしたい(N=125)
意向計：61.6%

【「遺贈」の魅力ポイント】

- 遺贈の最大の魅力は「遺産の託し先を自分で決められる（46.1%）」こと。
自分の遺志をしっかりと形に残したい気持ちがあることがうかがえます。
- 次いで税制上のメリット「遺贈先によっては相続税の控除が受けられること（40.8%）」が上位に。

Q. 以下に挙げる「遺贈」の特徴について、どの程度魅力に感じますか。あてはまるものをそれぞれお選びください。

※値は「とても魅力に感じる」と「魅力に感じる」の合計値

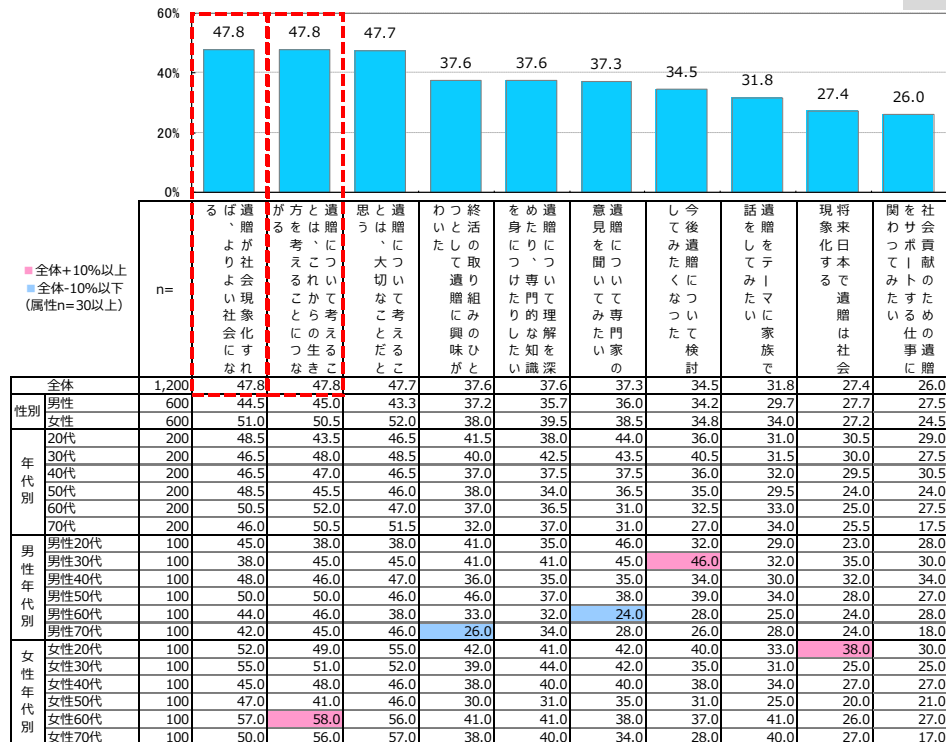


【今後の「遺贈」に対する気持ち】

- 遺贈に対する気持ちとして大きいのは「遺贈が社会現象化すればよりよい社会になる」
「遺贈について考えることは、これからの生き方を考えることにつながる」で、ともに47.8%。
自分らしい人生の生き方・終り方を考える人にとって「遺贈」は今後のキーワードと言えます。

Q. 今後の「遺贈」に対するお気持ちやお考えとして、あてはまるものをそれぞれお選びください。（お答えはそれぞれ1つ）

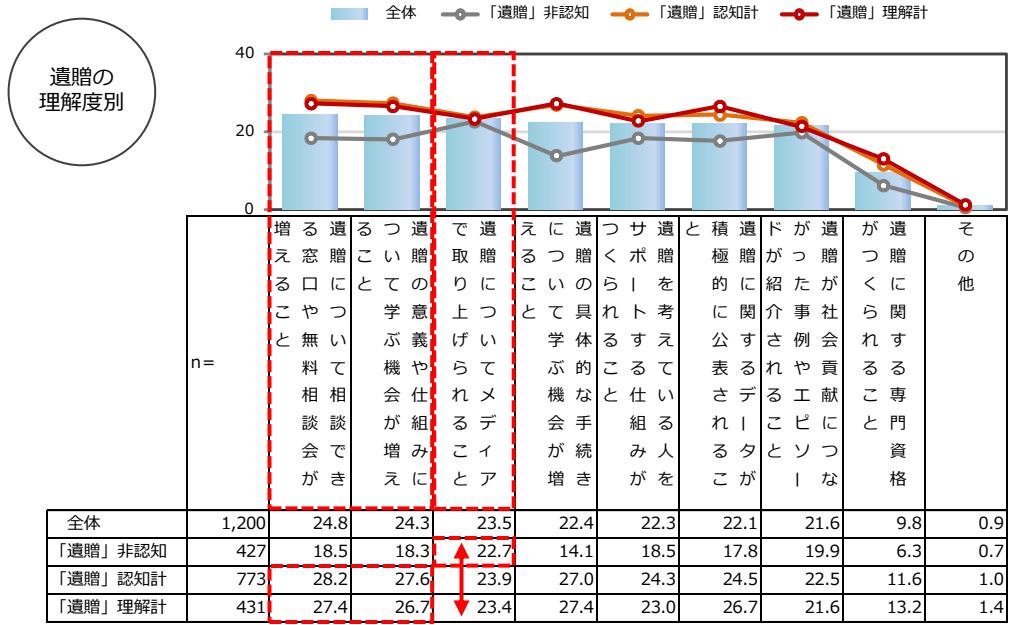
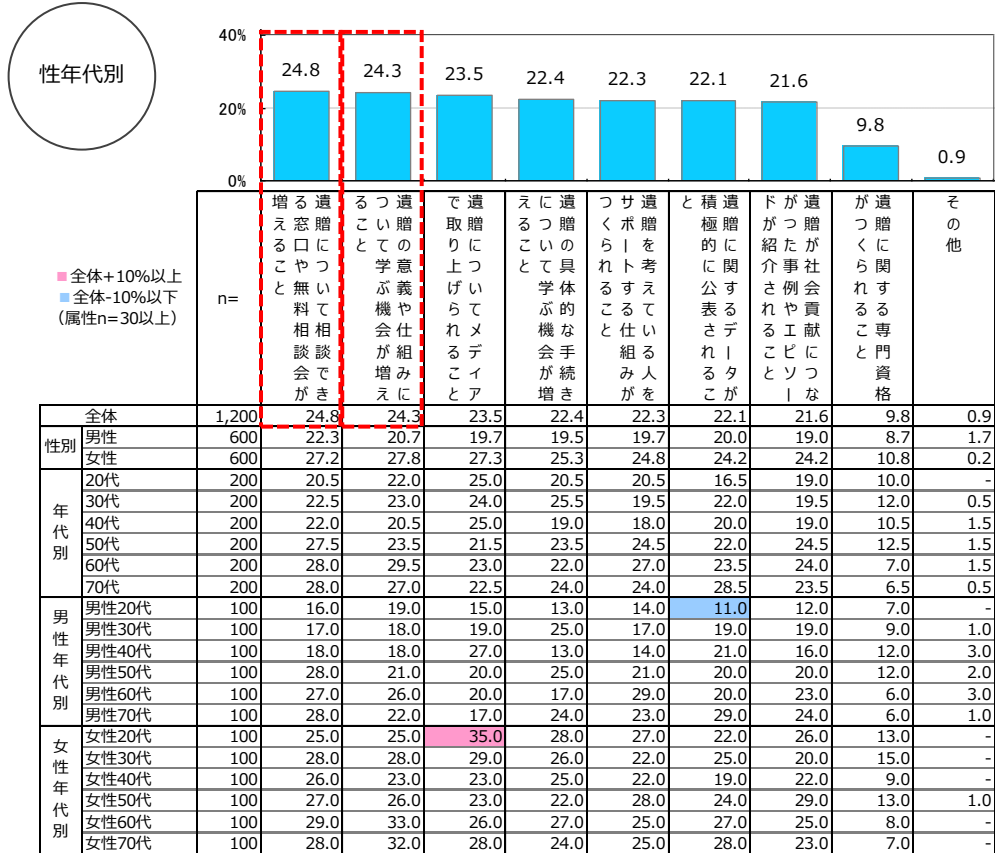
※値は「非常にそう思う」と「ややそう思う」の合計値



【「遺贈」の理解を広げるために必要なこと】

- 遺贈の理解がさらに広がるには「遺贈について相談できる窓口や無料相談会が増える（24.8%）」や「遺贈の意義や仕組みについて学ぶ機会が増えること（24.3%）」を期待する声が多く、今後こうした“遺贈について深く学ぶ機会”の充実が求められています。
- さらに、遺贈についての理解が深い人ほど「遺贈について相談できる窓口や無料相談会」や「遺贈の仕組み・手続きを学ぶ機会」などの、遺贈について知る機会を求める傾向があります。
- 「遺贈についてメディアで取り上げられること」は遺贈の理解度に偏りなく高い結果に。

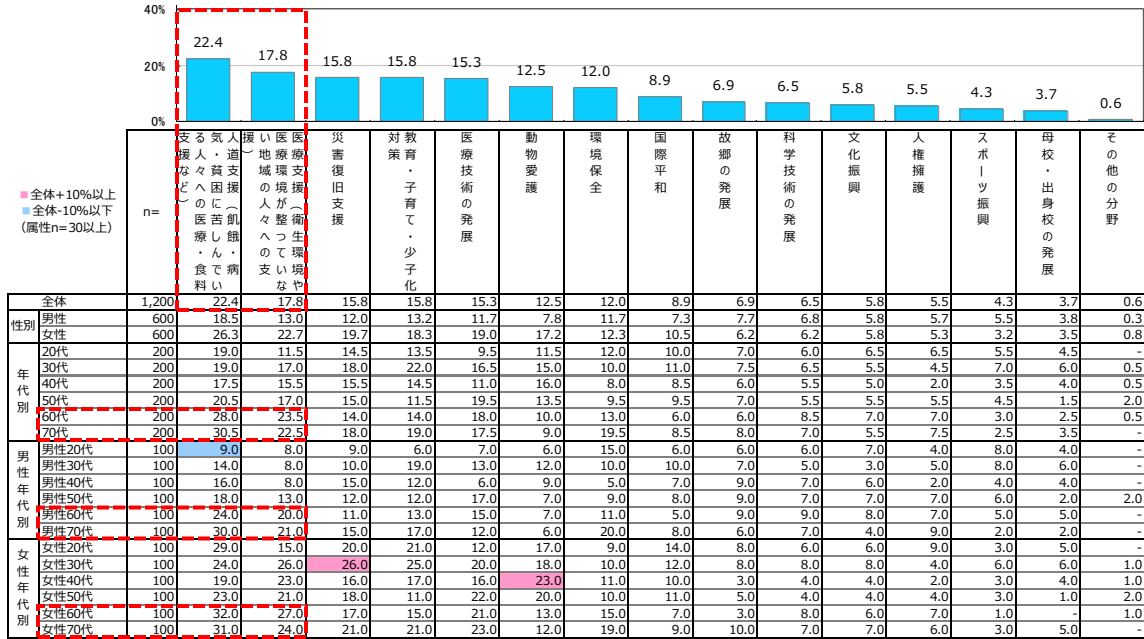
Q. 「遺贈」についての理解をこれからさらに広げるためには、どのようなことが必要だと思いますか。あてはまるものを全てお選びください。（お答えはいくつでも）



【どのような分野の役に立てるために「遺贈」したいか】

- 遺贈することで「人道支援（22.4%）」「医療支援（17.8%）」に役立てたい人が多く、**恵まれない環境で暮らしている方のために資産を活かしたい意向が見て取れます。**
- 特に**60代以上の高齢層ほど人道・医療支援のために遺贈したい気持ち強い結果となりました。**

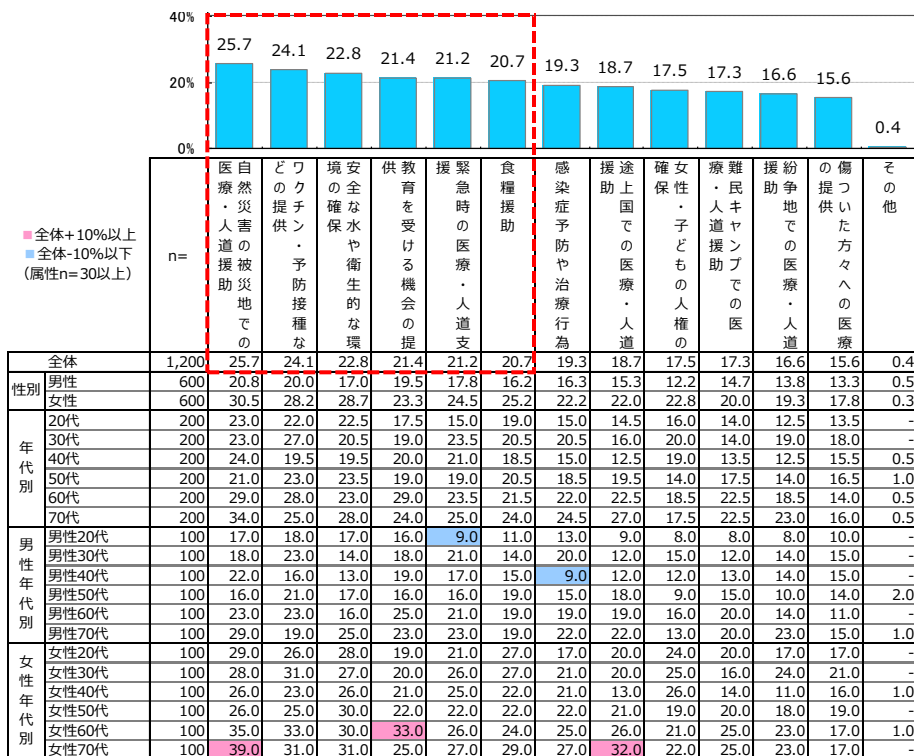
Q. もし、あなたが遺贈をしたら、どのような分野の役に立てるために遺贈したいと思いますか。あてはまるものを全てお選びください。（お答えはいくつでも）



【使われるとうれしい「遺贈」の用途】

- 遺贈後の使いみちについては「自然災害の被災地での医療・人道支援（25.7%）」が最も高い結果。
- 以下「ワクチン・予防接種の提供（24.1%）」「安全な水や衛生的な環境の確保（22.8%）」など多くの項目が20%以上であり、**遺贈された資産を幅広く活かしてほしい気持ちがあると言えます。**

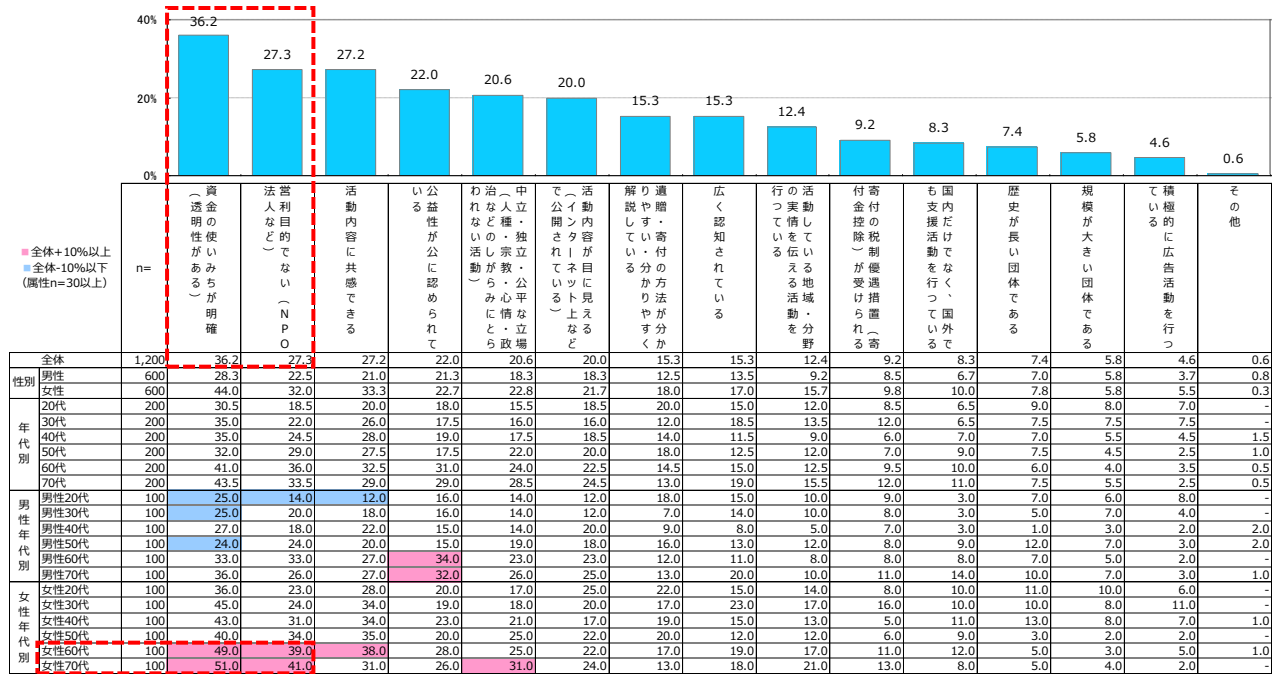
Q. 「国際援助団体」「NGO・NPO法人」に遺贈をした場合、どのような用途に使われると嬉しいですか。あてはまるものをすべてお選び下さい。お答えはいくつでも）



【遺贈の寄付を行う団体選択時の重視点】

- 遺贈先の重視点は「資金の使いみちが明確 (36.2%)」「営利目的でない (27.3%)」が上位。特に女性60代以上では、使いみちの透明性と団体としての信頼性が強く求められる傾向。
- 次いで「活動内容に共感できる (27.2%)」といった共感性も検討時のポイントに。

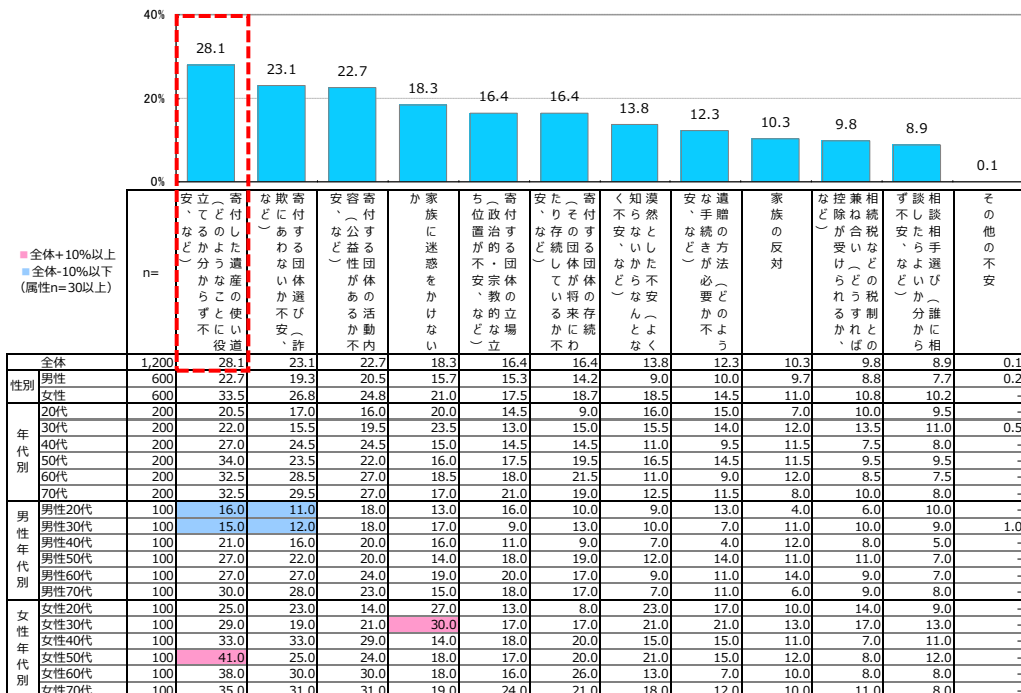
Q. もし、あなたが遺贈をするとした場合、寄付を行う団体を選ぶ際、どのようなことを重視しますか。あてはまるものを全てお選びください。(お答えはいくつでも)



【「遺贈」に関して不安に感じること】

- 遺贈検討時の最も大きい不安は「寄付した遺産の使いみち (28.1%)」であり、寄付した遺産の用途がきちんと示されることに対して高い関心を示している。
- 遺贈先として適切な団体を選ぶか (「寄付する団体選び」 23.1%) についても不安要素のひとつ。

Q. あなたが遺贈について考える際に、どんなことに不安を感じますか。あてはまるものを全てお選びください。(お答えはいくつでも)

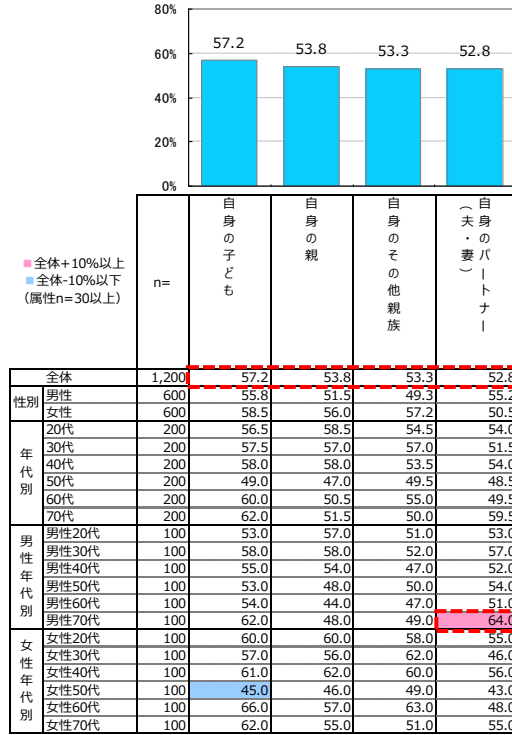


【親族が遺贈を希望した場合の賛否】

- 「子ども (57.2%)」「親 (53.8%)」「夫・妻 (52.8%)」など、
親族が遺贈を希望した場合でも半数以上は遺贈に前向きな反応を示すことが分かりました。
- 特に男性70代では「妻」が遺贈することに64.0%が賛同するという結果に。

Q. 以下に挙げる人が遺贈を希望したとしたら、あなたは賛同しますか。あてはまるものをそれぞれお選びください。

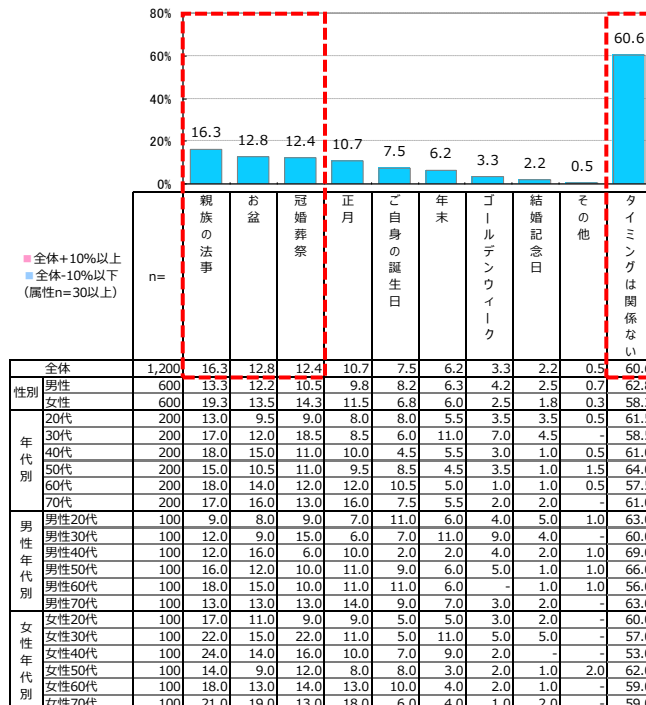
※値は「賛同する」「どちらかといえば賛同する」の合計値



【「終活」「相続」について家族・親族と話し合う適切なタイミング】

- 終活や相続について家族・親族で話し合うタイミングとして「法事 (16.3%)」「お盆 (12.8%)」「冠婚葬祭 (12.4%)」といった家族・親族で集まるタイミングが上位に挙げられました。
- 一方、「タイミングは関係ない (60.6%)」が最も多い結果となり、終活や相続について話し合う機会はいつでも得られるという認識もあるようです。

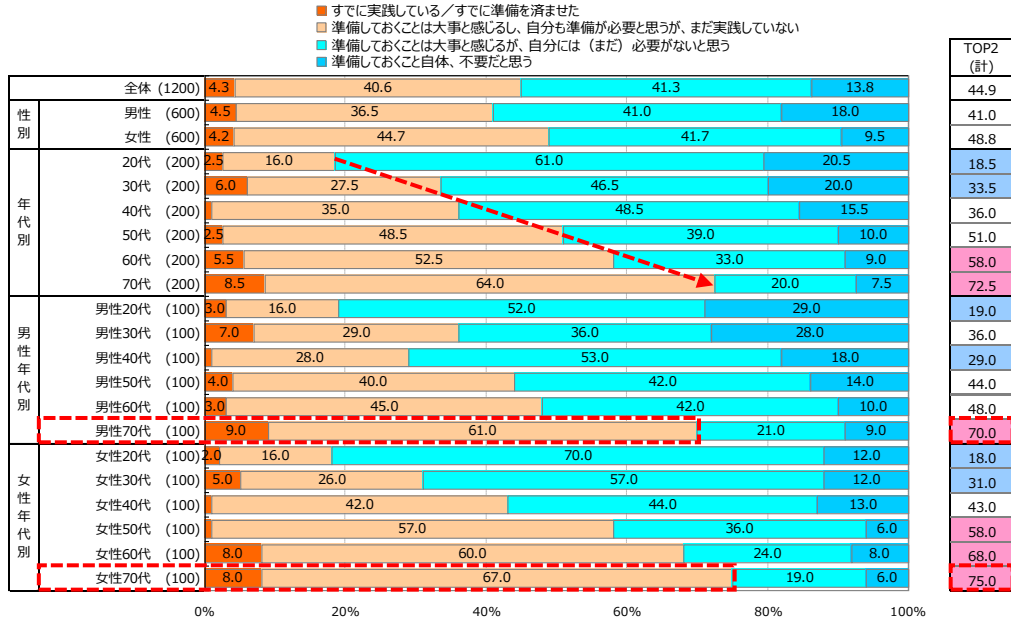
Q. 「遺贈」をはじめとした「終活」「相続」について、家族・親族と話し合うタイミングとして、適切だと思うものを全てお選びください。(お答えはいくつでも)



【「終活」との関わり】

- 終活の重要性を理解し自分ごと化している人は、全体の44.9%と半数程度。
- 年代が高まるほどに終活への関与も高まる傾向にあり、特に男性70代では70.0%、女性70代では75.0%が終活準備の必要性を感じている結果に。

Q. 「終活」への取り組みとご自身との関わりについて、あてはまるものをひとつずつお選びください。（お答えはそれぞれ1つ）

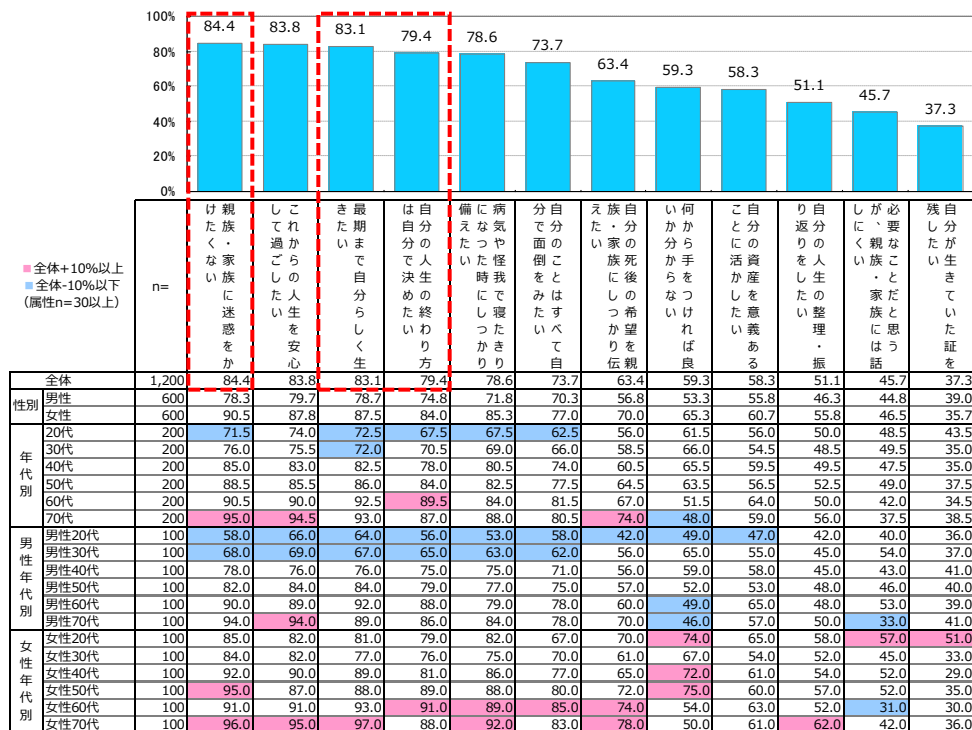


* TOP2: 「すでに実践している/すでに準備を済ませた」と「準備しておくことは大事と感じるし、自分も準備が必要と思うが、まだ実践していない」の合算値

【「終活」に対する気持ち】

- 終活に対する気持ちとして「家族に迷惑をかけたくない (84.4%)」という家族を労る気持ちが見られます。
- 「最期まで自分らしく (83.1%)」「人生の終わり方は自分で決めたい (79.4%)」も高く、自らの意思で自身の最期について考えたい思いがあることが分かりました。

Q. あなたの「終活」に対するお気持ちとして、あてはまるものをそれぞれお選びください。（お答えはそれぞれ1つ）



■ 調査概要

調査対象者	全国／20～70代の男女各100名 計1,200サンプル							
	割付	20代	30代	40代	50代	60代	70代	合計
	男性	100	100	100	100	100	100	600
	女性	100	100	100	100	100	100	600
	合計	200	200	200	200	200	200	1200
調査方法	インターネット調査							
調査対象	20代～70代の男女各100名 合計1200名							
調査エリア	全国							
調査期間	2018年6月22日～2018年6月28日							
調査協力会社	株式会社ネオマーケティング							

■ 国境なき医師団とは

国境なき医師団（Médecins Sans Frontières=MSF）は、独立・中立・公平な立場で医療・人道援助活動を行う民間・非営利の国際団体です。1971年に設立し、1992年には日本事務局が発足しました。

MSFの活動は、緊急性の高い医療ニーズに応えることを目的としています。紛争や自然災害の被害者や、貧困などさまざまな理由で保健医療サービスを受けられない人びとなど、その対象は多岐にわたります。

MSFは世界各地に29事務局を設置しています。主な活動地はアフリカ・アジア・南米などの途上国です。2017年は4万5000人以上の海外派遣スタッフ・現地スタッフが、世界70カ国以上で活動を行いました。また、MSF日本からは117人を派遣しました。派遣回数のはのべ169回で、29カ国で活動しました。

MSFの活動は、ほぼすべて民間からの寄付で成り立っています。また、活動地へ派遣するスタッフの募集も通年で行っています。さらに、活動地の現状報告や患者の方々の声を届ける証言・広報活動も重視しています。

【国境なき医師団日本 概要】

名称 : 特定非営利活動法人 国境なき医師団日本（認定 NPO 法人）
会長 : 加藤寛幸（医師）
事務局長 : ジェレミイ・ボダン
設立年 : 1992年
所在地 : 162-0045 東京都新宿区馬場下町 1-1 FORECAST早稲田FIRST 3階
公式HP : <http://www.msf.or.jp/>
掲載ページURL : http://www.msf.or.jp/legacy_survey2018/pdf/survey2018.pdf

■ 報道関係の皆様へ

本プレスリリースの内容の転載にあたりましては、
「国境なき医師団日本 調べ」と付記のうえ
ご使用いただきますよう、お願い申し上げます。

本調査および遺贈寄付に関するお問い合わせ先
国境なき医師団日本 担当：宮原
E-Mail : legacy@tokyo.msf.org
電話：03-5286-6194/FAX：03-5286-6124

報道関係者様からのお問い合わせ先
国境なき医師団日本 担当：館
E-Mail : press@tokyo.msf.org
電話：03-5286-6141/FAX：03-5286-6124